ネパール旅行報告

３月１１日～１８日に６４期街道歩きグループの有志５名（清水計枝氏、山浦ひろみ氏、安武智子ご夫妻、柳澤信義）がネパール旅行を行った。

旅行のきっかけは 2013 年の関東同窓会総会の特別講演で宮原巍氏(50 期)のお話しを拝聴したことであった。宮原氏はホテル・エベレスト・ビューのオーナーであり 1971 年にヒマラヤ観光の草分けとして世界で初めてエベレストに最も近いこのホテルを建設し、現在はヒマラヤ観光開発社長として観光業・ホテル経営と更に新しいホテルやケーブルカー等を建設中である。

特別講演後にネパール旅行でホテル・エベレスト・ビューを訪問したいとの思いがあったが、街道歩きのグループでは中山道 69 次の旅に連続して東海道 53 次の旅が始まり、また 2015 年にはネパールで大地震が発生したりで旅行が延び延びとなっていたが、ようやく今年３月にネパール旅行とホテル・エベレスト・ビュー訪問の実現となった。

参加メンバーの内２人は、20 年前または 10 年前にネパール旅行の経験があり、その時は西部方面のアンナプルナが中心だったが、今回はエベレストを中心にしたヒマラヤ東部の観光となった。そのためその後にネパール全域を襲った大地震の被害や復旧の状況が気掛かりのようであった。参加メンバーの内 3 人は、初めての訪問のため、一生に一度は経験してみたいネパールの旅であり、ヒマラヤ・トレッキングや仏教のふるさとへの訪問等の関心であった。

ホテル・エベレスト・ビューを訪ねて

バンコック空港経由でネパールに到着し、翌日はカトマンズ（800m）で１日を過ごして高地に身体を順応させてから３泊４日の登山旅行に臨んだ。首都カトマンズの砂ぼこりは相変わらずの状況のようであったが、人口の集中や自動車の急増等で大気汚染が一層進んでいるとのことであった。

登山第一日目（13 日）は早朝から国内線のプロペラ機（定員 20 人）を使ってカトマンズから中継地のルクラ空港(2840m)まで約 40 分間飛行した後、更にヘリコプター（定員５人）で約 40 分間飛行してナムチェ（3440m）に到着した。ここでロッジ・ヒマラヤ・カルチャー・ホームに１泊し、翌日にホテル・エベレスト・ビューを目指して登山する計画である。（当初の計画ではルクラ空港からヘリでホテル・エベレスト・ビュー近くのシャンボチェ空港（3800M）まで飛行した後、徒歩で約３時間かけてナムチェまで降りる予定で

あったが、天候が悪いためルクラ空港からヘリコプターで直接ナムチェに移動するように変更となった。そのため時間に余裕が生まれ、ゆっくりとナムチェ・バザールでのお土産品の買い物などを楽しむことができた。反面、移動を兼ねたトレッキング時間が省略されたため、その分翌日の登山に向けた身体の準備（高所登山順応）が不足したのではないかと思われる。）

ナムチェでは家の軒下に大きな氷柱が下がり、道路には雪が積もっていた。旅行前の予想では昼間気温は10℃程度の秋の気候の中でトレッキングする予定であったが、この日は前日に雪が降って真冬の寒さとなったため、厚着が必須となり夜間は気温が零下10℃にもなるため湯たんぽを抱いて寝ることになった。同行者の中には高山病の症状が現れる者もあった。

登山第二日目は運よく快晴で、宿泊したホテルから、ホテル・エベレスト・ビュー（3880M）を目指して約半日のヒマラヤ・トレッキングに挑んだ。途中、青空に白銀のヒマラヤの峰々が繋がり、しばしば立ち止まって、その美しさに息を呑んだ。左手には切り立った断崖絶壁を持ったクワンデ峰（6187m）、その奥に大きなク―ンビラ峰があり、右手には馬の鞍のような稜線を持ったタムセルク峰(6623m)、その奥にアマダブラム峰(6812m)があり、これらの峰々に囲まれながらヒマラヤの懐の中に分け入るように歩くと、やがて正面にタウツエ(6501m)が見えてきた。そして昨日ヘリコプターで到着する予定だったシャンボチェ空港付近（3800m）にようやく到着したが、まだエベレストがどこにあるのか分からない。やがてその先に頂上らしき峰が見えてきたが、これは前峰のローツエ(8516m)でありエベレストではなかった。エベレスト（8848m）はそれより後方に小さく低く見える峰らしい。遠近法によって近くの峰の方が大きく高く見えるため、エベレストはこの位置からは頂上には見えなかった。ヒマラヤはヨーロッパ・アルプスと較べても比較ができないくらいスケールが大きく奥が深いことがよく理解できた。

シャンボチェ空港付近はやや平地であり雪が積もっていたが、その先にある小高い丘の上にホテル・エベレスト・ビューがあった。ヒマラヤスギの緑の中に赤い建物が見えたので、あとわずかで到着かと思われたが、最後には神社にあるような長い石段が現れて、これを登ってやっとホテルの玄関に到着した。玄関ロビーの床は石張りで食堂との境には天然の巨石がそのまま据えられており、食堂にも石造りの暖炉が置かれていた。石の基礎の上に12の客室やサニールーム等の木造建屋があったが、強風や大雪に耐えるようながっしりした平

屋構造であった。このホテルの建設に必要な大量の石材・木材は麓から運びあげたものであるそうだが、50 年前には全て人力であり延べ 25 万人を要したとされる。ホテルのロビーには、オープン初日の泊り客になる予定だった深田久弥氏や替わって宿泊することになった三浦敬三氏（三浦雄一郎氏の父親）の写真が置かれていた。

食事はもちろん日本食であり、ふるさと信州の山野の食べ物を思い出させるものがあった。

ヒマラヤ・トレッキングに参加　～シェルパ族の村を訪ねて～

登山第三日目は、トレッキング参加はオプションなので、高山病気味の人はホテルで休憩したり、近くを散策したり、各人自由行動であった。私は、ホテル近くのクンデ村（3800m）からクンデ山頂（4200m）を目指してトレッキングに参加したが、山稜付近は積雪がまだ深く歩行が困難であることが判ったため、途中で引き返して麓のクンデ村やクムジュン村の様子を見て廻ることにした。これらの村々はチベット民族のひとつシェルパ族の村であり、ヤクの放牧やヒマラヤ登山客の案内・荷担ぎ等で生計を立てている部族であるが、現在はカトマンズや中東などへ出稼ぎする人も増えているそうだ。村々には各 300 人程度の人が住んでいて、生活用品の売店、エベレスト初登頂で知られるヒラリー卿が建てた小学校や診療所があるので、日常生活で困ることはないようだ。

村の男達が総出で地震によって崩れた仏舎利塔の修理を行なっていたり、女達が地中の大穴から越冬した芋を掘り出していたり、小さな子供達が寒さにめげず尻を出して子犬のようにじゃれ合って遊んでいたり、厳しい自然の中にあっても平和でのどかに暮らしているように思われる風景があった。

クムジュン村では、大きな寺院を修復中であり、村人の大工がのこぎりやカンナを使って材木を整えていた。大地震の修復にまだ時間が多くかかりそうな様子であったが、ここで案内人がイエティ（雪男）の頭髪があると言って寺院の係が奥の方のロッカーから黒い怪しげな物を運び出してきた。拝観料として一人 500 円が必要であったが、寺院の修復に役立てばと考えて支払った。

そうこうするうちに午後３時頃となって、午後から裏山に流れていたガスが麓まで流れてきて急に視界が暗くなってきたので、帰路を急いだ。ホテル・エベレスト・ビューはこの村から 80m ほど登った小高い丘の上であり、坂道を上っている途中で雪が降り始め風が強くなってきたが、なんとか無事にホテルに到着できた。村で先程まで働いていた男達も女達もお尻を出して遊んでいた

子供たちも急いで家の中に戻ったことであろう。山の天気は変わりやすいものであるが、この村の人々はこれが日常であろうと思う。日本でいえば富士山の標高で雪や強風に耐えて生活していると同じであるが、このような過酷な自然環境においても人間が順応して生活できていることはやはり驚きであった。

３泊４日間のヒマラヤ・トレッキングを終えて、翌日早朝にホテル付近のシャンボチェ空港からヘリコプターで、中継地のルクラ空港からはプロペラ機でカトマンズに戻った。途中、機上から地上を見ると、ヒマラヤの峰々から氷河が流れ出し、やがて川となって、その脇を登山ルート（エベレスト街道）が走っているのが見えた。昔の人はここを何日もかけて苦労してエベレストに登ったはずであるが、今は飛行機でひとっ飛びで楽である。しかし、秘境が秘境でなくなっていくのは、果たして良いことか悪いことか、議論が続くであろう。

カトマンズの観光　～仏教のふるさとを訪ねて～

カトマンズに戻ってから２日間は市内観光等の時間であった、お土産にネパール茶を購入したり、ヒマラヤ観光開発社の現地スタッフの案内で、市内のヒンズー教寺院、仏教寺院などを見て廻った。観光ポイントでは大地震による被害がほぼ修復されて、多くの観光客が訪れていたが、まだ全く手つかずに放置されている建物も多々見られた。現地スタッフのお話によると、復旧のため海外からも資金援助が寄せられているが、このお金が約 600 人の国会議員（部族の有力者）の懐に入ってしまい有効に使われていないとのことであった。

ヒンズー教の生き神様が見られるというので、物珍しさにその住まいの館を覗いてみた。神様らしい化粧をした少女が無表情に鎮座しており、観光客がその前に座ると額にチカという赤い汁を塗ってくれる。観光客は順番にお参りし 50 円ほどお布施を置いて去る。少女はお祭りのある日以外、毎日こうやって館に鎮座し学校にも通えないので学校の先生が家庭教師として派遣されてくるそうだ。生き神様になるには、生贄の牛が殺されるのを見て泣いたり逃げだいたりしないことなど 32 項目の難しい試験に合格しなければならない。おどろきはシャカ族の子孫であることが合格条件であり、仏教とのつながりが見えた。

ネパールの宗教人口は、現在ヒンズー教が８割、仏教が２割とされているが、互いに争うこともなく国民の中で共存しているようである。

この地方には、元々全ての自然物に生命が宿ると考える原始的な多神教(ヒンズー教等)があって神々のお祭りには牛を殺して捧げる生贄等の慣習があったが、

それに対して、仏教はこれらの原始的な宗教や文化をベースにして輪廻の思想を確立するとともに偶像崇拝を止めて殺生禁止を説いたようだ。

中国を経由して日本にたどりついた仏教には仏像があるが、この地方の仏教寺院には仏像が無くて世界中を見渡すという眼が建物に描かれているだけであったが、これが原始仏教の形に近いものであろうと思われる。

今回のネパール旅行で、仏教のふるさとは地理的には現在のインドではなくネパールであったことに気付いた。仏教のふるさとは天竺（インド）と教えられてきたため、また仏像（釈迦如来など）の服装が薄着であるため、きっと暑いインドの方だと誤解していたように思う。実際の地理を調べると、シャカ族の王子であるゴータマシッタルタ（ブッダ）の生誕の地ルンビニーは現在のネパール領内であり、彼が仏教を広めた地もインドとの国境付近にあった。

いわばインドの北部であり、気候も寒い地方である。そもそも原始仏教では仏像がなかったので服装等は推測の域を出ないが、もっと厚着をしなければお釈迦さまも風邪を引いて布教活動が困難であっただろうと思う。

宮原社長宅を訪ねて

宮原氏は、学生時代からの登山活動や就職した企業を休職して参加した南極観測隊の経験を経て 1965 年に単身でネパールに渡り世界で初めて 3880 メートルの高所でのホテル建設を多々の難題（ヒラリー卿の反対など）を乗り越えて実現した人物であり、その後ネパール国籍を取得し、アジア最貧のネパール国の自然環境保全と観光立国の両立を目指す立場からネパール政治への参加にも挑戦される行動派である。（詳しい経緯については「ヒマラヤのドン・キホーテ　~ネパール人になった日本人・宮原巍の挑戦~」：根深誠著,2010,中央公論新社発行をご参照。）

現在、ヒマラヤ観光開発社長として観光業や新しいホテル建設でご多忙の中、我々上田高校後輩のネパール訪問を聞いて、わざわざカトマンズのホテルまでお越しいただいき、更に翌日にはカトマンズの隣市にあるご自宅での夕食会にご招待をいただき、一同感謝感激でした。そしてその日はたまたま宮原氏のお誕生日だったため、家族の皆さんとご一緒に満 83 歳を祝うことができました。宮原氏もアコーディオンで懐かしい曲を演奏して我々をもてなしていただき楽しいひと時となりました。これにつきましては、関東同窓会報６月１日号でも報告させていただきましたので、宮原氏に御礼状に添付してこの同窓会報を送らせていただきました。（2017 年 5 月 30 日　柳澤信義）

ナムチェのロッジ・ヒマラヤ・の前にて

ホテル・エベレスト・ビューを目指して

ホテル・エベレスト・ビューに到着

シェルパ族の村で働く女たち

シェルパ族の村の子供たち

カトマンズで宮原巍氏を囲んで